

年齢別方言資料に見られる言語変化

丹 羽 一 彌

Age-group Dialects and Linguistic Changes

Kazuya Niwa

言語の変化を研究するには、まず過去の文献資料によって変化の跡づけが行なわれる。ところがこういう方法で得られるのは、運よく残っている資料を飛石のようにピョンピョン跳んで渡って来て、その行程を一つの連続した歴史として構成したものである。従ってそのうちの移動したピョンピョンの部分は、実際に観察できるのではなく、前後の資料から推定しなければならない。特定言語の歴史的事実の解明だけではなく、一般的に言語変化の過程・要因などを見ようとすると、その飛石と飛石との間を観察したいのである。肝心のそここのところが推定部分というのでは具合が悪い。

そここのところ、言語が徐々に移り変わっていくところを何とかはっきりさせられないか。そういうことで浮上してきたのが言語地理学である。これによれば、言語の時間的な移り変わりの様子が、平面的な地図上の分布という形で見られる。言語変化という現象をとらえようとする者にとって、微細言語地図から言語変化の実際を読みとるのは、仮説を検証するための実験をするようなもので、極めて魅力あることである。

微細言語地図と並んで、言語変化の様子を詳しく見せてくれるものがある。年齢別方言資料である。これはある一地域のはえぬきの話者全員を調査し、そのことばを年齢別に見たものである。その土地で言語形成期に習得した言語、即ちその当時の使用語を年齢順に並べれば、その土地での言語の移り変わりが見られることになる。移り変わりは見られるが、現在生きている人のことばを年齢順に並べても、その歴史的な長さはせいぜい70~80年ぐらいである。言語の長い歴史と比べると、これだけでは随分短いミニ歴史である。しかし言語変化一般という視点で見れば、それだけの期間でもいろいろな変化の様子が観察できるものである。

以前、和歌山県熊野川町で全員調査し、その年齢別資料に見られる言語変化について次のように述べた。

使用語の変化と言っても、多くの項目では交替は一回で、それも伝統的な方言形から共通語形への交替が多いということである。ある方言形から別の方言形に交替し、さらにそれが新しい語形へと何回も交替するような例は、この地域の現存者を調査しただけでは、

よほど恵まれないと見つけられないようである^①。

現在、日本の諸方言は急速に共通語化しているので、上のことは今でも広く有効である。しかし熊野川町の調査は、方言地図解釈のための補助資料を得るためのものであり、全員調査そのものを目的に準備したものではなかった。従って調査項目は、この地方の方言地図上での差異を重視して選定したもので、特にこの調査地点での移り変わりに目をつけたのではなかった。その点で上の見解は、言語変化の一部をとらえているにすぎないと反省している。地理的な広がりや他の地点との関係とは別に、その土地での言語変化の過程を詳細に観察しようとするならば、その調査を一つの社会言語学的調査として位置づけ、最初からそのように計画すべきである。調査項目も『日本言語地図』の項目のように広い地域で共通に利用できるものに限る必要はない。その土地で年齢差の目立つものだけを調べるようにすれば、上に述べたような方言形から共通語形への交替だけではなく、実にいろいろな変化の姿が見られる。

本稿では、次の調査によって得られた年齢別資料の中から特徴的なものを選び、言語変化の細かい様子を観察する^②。

調査地域	話者数	調査者	調査年
愛知県高浜市吉沢町の一部	98人	神谷千春	1984
愛知県南知多町豊浜の一部	93人	飯田早苗他	1984
岐阜県土岐市下石の一部	82人	奥村由美	1984
和歌山県熊野川町相須など	76人	丹羽一彌他	1982

なお以下で変化の時期については話者の生年を基準として述べる。仮にその語を習得したのが言語形成期であるとするれば、その土地での実際の言語変化は、以下の生年を基準としたものより10年前後遅れていると考えられる。

* * *

まず変化の速さというか、変化の期間を見てみよう。

ある地域の使用語が語形AからBに交替するには、A専用→A B併用→B専用という適程を経るのが普通である。全員がAを使用しているところに、新しく若年層からBを使用する人が現われ、同世代で両者併存となるが、次第にその数が増加する。世代を経るに従ってA使用者は減り、やがて地域全体としてもB使用者だけになるという、普通の交替である。

このようにゆっくり交替する例としては、表1の熊野川町の「ふすま」がある。ここでは古くカラカミだけが使用されていたが、明治36年生まれから一部の人によってフスマが使用され始める。以後新世代ではカラカミ・フスマの併存期間が続くが、大正12年には新語形フスマが圧倒的に優勢になり、昭和9年以降は完全にフスマを習得する人だけになってしまった。カラカミ使用者はもう増加せず、年とともに減っていく。新規習得者でカラカミ・フスマ併存の期間は20～30年であり、ほぼ一世代にあたる。『日本言語地図』192によると、フスマは近畿中央部から徐々に周囲に広がっている。このように地を這うようにして侵入して来る新語形が、

ある地域で旧語形と交替するには、侵入後一世代かかるということであろうか。

表1のような漸進的な交替に対して、もっと急激に交替した例もある。例えば表2の南知多町の「まつかさ」である。ここでは昭和21年まで長くマツカサが使用されていたが、昭和22年から一挙にマツボックリになっている。Aだけであった地域で新規の年齢層全員が突然Bだけを習得したのであり、A・Bの習得者が併存した期間がない。このような変化から、この地のマツボックリは、地を這うように徐々に侵入して来たのではなく、話者に習得を強制する何か人為的な要因によってもたらされたもののように思われる。

この人為的な要因として考えられるのは、それ以前の人にはなく、新しい年齢層だけに与えられた特別な環境があったということである。そういう場所は集団教育の場であろう。小学校教育、あるいは幼稚園・保育園などであるが、この場合は保育園と思われる。南知多町のこの地域に保育園ができたのは昭和28年のことである^⑩。昭和28年といえば、23年生まれの人が5歳になる年である。保育園はこの問題にかなり有力ではないだろうか。

しかし熊野川町においても昭和20年ごろマツカサからマツボックリになっている。このように離れたところにおいても同じ頃に新語形が広まっているので、ただ南知多町の保育園だけが原因とも思えない。何か別のものがある。ということになると、「まつかさ」をマツボックリと歌った童謡が思い出される。この童謡の出現と保育園の普及によって、各地でこの歌を習う機会が急激に増えたので、新語形マツボックリはこの土地を含めて一挙に広がったというのはどうであろうか。マツボックリが広がったため、マツカサという共通語形（と筆者は思っているが）はもはや習得されなくなってしまった。

* * *

次に語形交替の回数である。前述のように、熊野川町調査は方言地図解釈のための補助調査であったために、方言形→共通語形という一回だけの交替が多く見られた。しかし全員調査用の項目として、その土地で年齢によって差の出そうなものを選べば、明治以来何回も交替している例が見られる。

まず表3の南知多町「行こう」である。ここでは古くイカメ系統の表現がなされていたが、これは愛知県の諸方言に見られるイカマイ・イコマイと同じものである。マイやメの意味は共通語助動詞「う・よう」にあたり、キャやカナは助詞であるから、全体の意味は、古い方から「行こうかい」・「行こうかね」・「行こう」などとなる。南知多町は知多半島の先端に位置し、三河に近いので、三河方面のようにメは未然形イカに接尾している。その後新しい表現が生まれ、昭和16年からイカシンが、次いでイカヘンが使用されるようになった。このシン・ヘンは否定の助動詞であるから、全体の意味は「行かない？」ということになる。それ以前はイカメ系統の表現に助詞が付くか付かないかという違いであったが、ここで勧誘の表現方法が大きく変わったことになる。

次に表4・5は同じく南知多町の「混ぜ御飯」と「額」である。これらにおいてもいろいろ

な形式があり、それらが併存したり、次々と交替したりしている。

以上のように項目の選定さえうまくいけば、共通語化とは関係なく、その土地の表現・語形ばかりで多くの交替が見られるものである。

* * *

言語体系全般について言えば、各地の方言が共通語的表現に向かっているのは事実である。しかし語形など個々の項目について見てみると、必ずしも全てがその方向を向いているという訳でもないようである。語形交替の結果、最終的には共通語形に落ち着くものもあろう。しかし何回も語形交替しているのに、そうならないものもある。またある段階で一度は共通語形になったものにしても、それがさらに共通語形以外の別の形式に交替していく例もある。

表6・7・8は土岐市の例である。まず「つむじ」であるが、いろいろ交替した結果、一旦は共通語形と同じツムジになっている。それにもかかわらず、昭和36年からグリとかグリグリが現われ、さらに38年にはウズマキも出現している。そしてかなりの勢力を誇ったツムジの方は、最近になって少なくなっている。次に「盗む」を見ると、共通語的な表現ヌスム・トルが長く使われていたが、これも同じ頃に別のケル・バクルに交替している。表8「おたまじゃくし」についても同様である。

こういう例はまだ他にもある。これらに共通しているのは、共通語形とは異なる語形の出現するのが、いずれも昭和30年代の末期だということである。それ以後に生まれた年齢層は、まだ社会的に未熟であるために、共通語形を習得していないということであろうか。それとも共通語という規範とは関係なく、ただ単に目新しそうな表現に飛び付いただけなのであろうか。そうであれば、成長していくにつれ共通語形を習得し、それを使用するようになるであろう。この年齢層はちょうど調査者と同世代なので、よく俗語形まで拾えたということなのかもしれない。これらがこの土地での「新方言」ということになるだろうか。

* * *

以上で見てきたのは、交替の速さ・回数は異なっても、また共通語形が関係したにしても、単純な語形交替またはその連続した変化であった。次に特徴的な言語変化を見てみよう。

まず音位転倒 (Metathesis) の例である。音位転倒とは、一つの形式の中で互いに接している、または近くにある音素がその位置を取り替えることであり、アラタシ→アタラシ・ツゴモリ→ツモゴリなどがよく例に出される。このツゴモリとツモゴリの二つを比べて、音位転倒によってツモゴリが出現したと言えるのは、ツゴモリの方を伝統的な語形だと知っているからである。しかしこれだけではツゴモリが、どこで、どのように音位転倒したのか観察することはできない。また不幸にして歴史的資料のない場合、A→Bなのか、その反対なのか、二つを見比べていたのでは、変化の方向さえわからない。

この点で微細方言地図は有力である。ある形式が広く分布している中に、一部の地域だけに音位転倒している形式が分布していれば、それはその土地で新しく発生したものであると解釈

ズルが使われていた。大正になるとイナウも使用されるようになるが、ズルは消えることなく続き、かえってイナウの方が早く消えてしまった。このイナウとほとんど同時にカズクも使用され始め、こちらの方は長く使われた。その後昭和になってズルが消える頃、カツグが使われるようになり、現在ではカツグだけになっている。一方の「天秤棒を一人でかつぐ」（以下では「天秤棒」）では、明治・大正ではずっとイナウであったが、昭和になってからカズクに交替した。この交替は何故か突然であった。やがてこちらの方も「もっこ」と同じ頃に強大な勢力を持つカツグが現われ、カズクからカツグへ徐々に交替している。

以上はそれぞれの意味の方を固定して、それを表わす語形の交替を個々に見たものである。今度は逆に語形の方を固定して、それぞれの語形がこの二つの意味にどのように関わっているのかを見てみる。そうすると、一方の語形の意味内容が拡大され、他方の意味まで覆おうとする様子がよくわかる。南知多町では、明治以来「もっこ」にはズルを、「天秤棒」にはイナウを使用していたので、意味の区別に対応して語形も区別され、その関係はズル対イナウで安定していた。大正になると、少数ではあるが「天秤棒」のイナウを「もっこ」にも使う人が現われ、その関係はくずれ始める。一部の人にイナウの意味拡大が起こったのである。この変化とは別に、この頃「もっこ」にカズクも使われ始めたので、両者の関係はズル・イナウ・カズク対イナウとなった。イナウとカズクの出現によって、「もっこ」の方は語形がはっきりしなくなってきた。

昭和になると、今度は「もっこ」のカズクの方に意味拡大が起こった。カズクは「もっこ」を意味するだけでなく、「天秤棒」の方をも表わすようになったのである。この拡大はかなり急激であり、「天秤棒」の方では突然イナウが消えてしまった。イナウの消失以後、「もっこ」対「天秤棒」の関係は、ズル・カズク対カズクということになる。さらに後になると、新しく両方にカツグが使われるようになる。ちょうどその頃「もっこ」の方では古くからのズルが完全に消える。この土地では、このズルの消えた段階で「もっこ」と「天秤棒」の意味の区別はなくなった。というのは、一方でカズクを使用する人は他方でもカズクであるし、カツグという人は両方ともカツグであり、カズクとカツグで意味を区別している人はいないからである。両方の意味でこの二つの語形が併存しているうちに、カズクがカツグの訛ったものだという意識があったのであろう、やがて全員がカツグとなり、現在に至っている。

以上のように南知多町では、昭和20年以前生まれの大部分は、ズル対イナウ、カズク対イナウ、ズル対カズクなど互いに対立させて、何らかの形で「もっこ」と「天秤棒」の区別をしている。この場合、カズクはどちらにも現われていて、人によって意味が異なる。しかし一方の語を他方にまで使用し、意味拡大を起こした若干の人にはその区別がない。また若年層にも区別がなく、意味も語形も共通語式になっている。

同じような例がある。表13・14は土岐市の二種類の「数える」である。ここでは意味の拡大も縮小も起こっている。この二つの変化を個々に見ると、どちらもカンジョーセル～スルから

カゾエルに交替していて、同じような変化に見える。しかし二つを一緒に見ると、別の面が見えてくる。昔は両方ともカンジョーセル〜スルで区別がなかったのに、昭和になると「物を数える」とときにはカゾエルと言う人が多くなり、カンジョー系統は少なくなる。「金を数える」はカンジョー系統のままであるから、一時は「物」対「金」の関係がカゾエル対カンジョーで区別され、別のものになったかのように見える。カンジョー系統に意味の縮小が起き始めたのである。しかしさらに後になると「金を数える」方にもカゾエルを使う人が現われてきた。両方にカゾエルという同じ語形を使うようになったので、再び「物」と「金」の区別がなくなってきたのである。表13・14によれば、明治以来カンジョー系統は意味の縮小を起し、新しく出現したカゾエルの方は拡大しているということがわかる。

単純な意味の変化というのではないが、年齢差による意味のずれについて面白い例がある。表15・16は高浜市での二種類の「紙」である。ここでは同じようにチリガミ・チリシといても、昭和初期生まれの一部の人にとっては「鼻紙」を、青年層の一部にとっては「トイレットペーパー」を指している。言語形成期の文化の違いを反映しているのであろうか。またこれとは別に、少数ではあるが、若年層の中には「トイレットペーパー」に対してハナガミを使用する人が出てきたので、ハナガミの方は意味の拡大が起きかけているようである。

* * *

高年層の使用語を若年層が習得しなかったら、その語形はやがて消失する。若年層が習得しないといっても、これにはいろいろな型がある。それを大きく分けると、その土地で使われなくなったので習得する機会がないものと、使われてはいるが若年層だから未習得という二つになる。前者の場合はそのまま消えていくが、後者の場合は、それを習得するにふさわしい年齢になれば習得するので、その年齢層に受け継がれ、地域のことばとしては消失しない。

実際に消失する途中と思われる例としては、表17、熊野川町のネシヨがある。これについては既に述べたことがあるが、調査方法は、ネシヨという語形を話者に示して、これを使用したことがあるのか、使用したことがなくても意味がわかるか、あるいは全く知らないのかを尋ねたものである^⑩。ネシヨというのは、ネシヨノクセニ「女のくせに」のように、女性をさげすんで仲間内で使用する表現であり、調査者のような外部の者が口にするのにふさわしい語ではなかった。そのために場が不自然となり、特に女性話者の中にはこの質問に答えにくそうな人もあった。従って表17は男性話者だけのものにしてある。

表17によれば、内輪の場で使用されていたネシヨのような語形は、やがてある世代から使われなくなってきた。その人たちは、年長者が使うのを聞いているので、意味は理解できるが、自分では使わない世代である。その人たちが使わないので、その次の世代はことばとして聞く機会もない。従ってそういう語のあることも知らず、それを習得することもない。こういう世代が老人となり、知らない人ばかりになれば、この土地ではネシヨという語はなくなる。こうしてその地域社会から一つの語形と概念が消えていく。一つの語が完全に消失するのは、この

ように数十年間の理解語の期間があって後のことである。

消失の例に表18の土岐市の「片足跳び」がある。ここでは昔からチングリという語形があったのに、中年層には習得されていない。チングリが習得されなくなったのは、この語形が聞かなくなったためか、他の遊戯など何か別の意味に使われるようになったためなのか、「片足跳び」という概念そのものがなくなったので、語形も不必要になったのか、あるいはその他の理由によるのか、今はわからない。いずれにしても、ある世代には「片足跳び」を指す語形が全くない。

ところがこの例が興味深いのはそのことだけではない。面白いのは、チングリが消失してしばらくすると、カタアシトビ・ケンケンなど、学校教育やマスコミの影響と思われる新語形が現われることである。語がなかったところに現われたので、語の出現ということになるのだろうか。そのとき語形だけが取り入れられたのか、概念も入ったのかは不明であるが、再び「片足跳び」を表わす語形がこの地域にもできた。この土地では、空白期間はあるが、形の上ではチングリ→カタアシトビ・ケンケンという交替になるので、高年層と若年層とは話し合おうとすれば何とかなるだろう。しかしそのとき中年層はどうするのであろうか。

次は若いのが故に未習得という場合である。言語のシステムは言語形成期にその全体が習得される。それに対して語彙量の方は、学習を通して年齢とともに増加していくので、成人の方が多いのは当然である。上に見たネショのような語ではなく、普通に使われているものでも、生活経験の乏しい若年層には未習得の語も多い。

例えば表19の高浜市の「明明後日」を見ると、ここでは明治以来いろいろな語形が交替しながら使われてきた。しかし若年層の中には知らないという人もある。このままでは、この人達が老境に達した頃には「明明後日」の語形など誰も知らず、この語はなくなってしまふことになる。しかし実際にはそうならないであろう。その概念は「明後日の次の日」というはっきりしたものであるし、日常よく使われる語であるから、語そのものが消失するとは思えない。今は若いから知らなくても、成長していく間に、いつか習得されると思われる。

表20・21は高浜市の「すり鉢」と「すりこぎ」であり、この地点では古くからスリバチとスリコギで安定している。若年層には知らない人もあるので、これらも消失途中のように見えるが、やはり上の場合と同じであろう。というのは、名前は知らないが物だけは知っているという人が多く、敢えて言わなければならないのならば、例えば「すりこぎ」なら「みそやごまをする棒」というように言っているからである。ここまで来ていれば、名前を習得するのはすぐである。表20と21とを比べると、「すりこぎ」の方が知らない人が多い。こちらの方が上のような呼び方で間に合い、正式な名称を覚えなくても済んでしまうからであろう。

これをもう少し詳しく見てみよう。表22・23は、上の表20・21の若年層を男女別にしたものである。これによると知らないのは男性が圧倒的に多い。男性は「すり鉢」や「すりこぎ」などを使い生活に近づく機会が少なかったから、その名称を覚えなかったのだと考えられる。以

上から、知る知らないは生活経験の差だということになる。「すりこぎ」などを使用する生活が続くかぎり、それを表わす語の消えることはない。これから生活して経験を積んでいけば、その名称も習得されていくであろう。

前の表10の「玄孫」においても若年層では知らない人が多かった。これも生活経験を積めば習得できるように思われるが、この項目に関しては少し違うかもしれない。最近のように核家族化が進んでくると、こういう親族名称の使用される機会が少なくなる。共通語や書きことばとして何らかの語形を習得することがあるにしても、日常生活の中でその土地の方言形を身に付けることは、かなり難しいことかもしれない。

* * *

以上のように、年齢別資料によってわずか70～80年間の移り変わりを見るだけでも、言語変化のいろいろな様子が観察できる。これらは限られた地域の特別な例なのかもしれない。しかし各地からさらに多くの例を集め、一般化の方向に進めば、それによって言語変化一般を論ずることができるようになる。

注

1. 拙稿「和歌山県熊野川町方言における使用語の共通語化と消失」（『東海学園国語国文』24号 1983）
2. 調査者の神谷・飯田・奥村は、当時、東海学園女子短期大学学生。なお調査途中で追加した質問もあるので、項目によっては話者の数の少ないものもある。
3. 南知多町教育委員会による。
4. 「おたふく風邪」は1983年、「大みみず」は1984年、東海学園女子短大の調査による。
5. 拙稿「混交の様子」（『名古屋・方言研究会会報』3号、1986）
6. 注1に同じ。

表1

表2

ふ す ま (熊野川)	生 年	ま つ か さ (南知多)
○○○	明治 30 31	
○	32 33	○
○○○	34 35	○
○ ★★	36 37	
○ ○★ ★★	38 39	○○
○○ ○★	40 41	○○○
○○○○ ○★ ★	42 43	
○○○ ★	44 45	○
○○	大正 2 3	○○
★	4 5	○○○
	6 7	○
○○○○ ★★	8 9	○○○○
○ ★	10 11	○○○○
★★	12 13	○○○○
★	14 15	○○○○
○	昭和 2 3	○○○○
★	4 5	○○○
★★★★	6 7	○○○○
○ ★★★★★	8 9	○○○
	10 11	○○
★★	12 13	○○○
★★★★★	14 15	○○
	16 17	○○○
★★	18 19	○○○
★★	20 21	○○○
★	22 23	★★★★
★★	24 25	★
★	26 27	★★
★★	28 29	★★★★★
	30 31	★★★
★★	32 33	★★
	34 35	★★★
★	36 37	★★
	38 39	★★★★★
★★	40 41	★★★★★
★★★★★	42 43	★★
★	44 45	★
	46 47	★★

○ カラカミ
★ フスマ

○ マツカサ
★ マツボックリ

表3

表4

行こう (南知多)	生年	混ぜ御飯 (南知多)
	明治 30 31	
●	32 33	◎
●	34 35	◎
	36 37	
◎◎	38 39	● ▲
◎◎ ◎	40 41	◎ ▲▲
	42 43	
●	44 45	▲
◎◎	大正 2 3	◎ ▲
◎◎◎	4 5	◎ ●●
●	6 7	◎
●◎◎◎ ◎	8 9	◎◎◎ ▲
● ◎ ◎◎◎	10 11	◎◎◎◎
●◎ ◎◎	12 13	◎◎ ●●
◎ ◎◎◎	14 15	◎◎ ● ◎
◎ ◎◎◎	昭和 2 3	◎ ●● ◎
◎ ◎◎	4 5	◎◎ ●
◎◎ ◎◎	6 7	◎ ● ▲▲
◎◎◎	8 9	◎ ● ▲
◎◎	10 11	◎ ◎ ★
◎◎◎	12 13	◎ ● ▲
◎◎	14 15	◎ ● ★
◎◎ ▽	16 17	◎ ◎ ▲
◎ ◎◎	18 19	◎ ◎ ▲▲
◎ ▽ ★	20 21	◎ ●◎ ◎
▽ ★ ▲	22 23	◎ ◎ ★
▽	24 25	★
◎ ▽	26 27	★★
▽ □□ ▲	28 29	◎ ★★★
▽ □□	30 31	◎ ◎ ★
▽▽	32 33	◎◎
□ ★★★	34 35	◎ ★★★
□ ★	36 37	◎ ★
□□□ ★	38 39	★★★
□□□ ★	40 41	◎◎◎ ★
□□	42 43	★★★
★	44 45	★
□ ★	46 47	◎◎

- イカメツキヤ
- ◎ イカメカナ
- ◎ イカメー
- ▽ イカシン
- イカヘン
- ★ イコー
- ▲ その他

- ◎ ゴモクメシ
- ゴモクハン
- ◎ ゴモクゴハン
- ▲ カキマワシ
- ★ ニンジンゴハン

表 5

表 6

額 (南知多)	生 年	つ む じ (土 岐)
	明治 30 31	
▲	32 33	▲
▲	34 35	
	36 37	▲
▲▲	38 39	◎
▲▲ ◎	40 41	◎◎
	42 43	▲▲ ◎
▲	44 45	▲▲ ◎
▲ ◎	大正 2 3	
◎◎ ◎	4 5	▲ ◎
◎	6 7	▲
▲ ◎◎ ◎	8 9	
▲ ◎ ◎ ★	10 11	▲ ◎
◎◎◎	12 13	
▲ ◎◎ ★	14 15	●
◎◎◎ ◎	昭和 2 3	▲ ●
◎◎ ●	4 5	▲ ◎ ●
●● ★★	6 7	◎ ●
◎ ●●	8 9	● ★★
◎ ●	10 11	▲ ◎ ●
◎ ● ★	12 13	●
◎◎	14 15	▲ ◎
◎ ● ◎	16 17	●
◎ ● ★	18 19	● ★★
◎ ◎◎	20 21	★★
◎ ◎◎	22 23	◎ ★
◎	24 25	◎ ●●
◎◎	26 27	● ★
◎◎ ◎◎	28 29	★★
● ◎◎	30 31	★★★
◎◎	32 33	◎ ● ★
◎◎◎	34 35	◎ ★★★
◎◎	36 37	★ ▽ ▽
◎◎◎◎	38 39	★★★ ▽ ▽ +++
◎◎◎◎	40 41	★★ ▽ ▽ ++
◎◎	42 43	★ ▽ +
◎	44 45	▽ +
◎◎	46 47	+

- ▲ シテグチ, ステグチ
- ◎ デスコ
- デーチャ
- ◎ オデコ
- ★ ヒタイ

- ▲ ノーテン
- ◎ マーマー, マイマイ
- マーマコ, マンマコ
- ★ ツムジ
- ▽ グリ, グリグリ
- +

表7

表8

盗	む (土 岐)	生 年	おたまじゃくし (土 岐)
		明治 30 31	
★		32 33	◎
		34 35	
	◎	36 37	◎
★		38 39	◎
	◎◎	40 41	◎◎
★	◎◎	42 43	◎◎◎
★★	◎	44 45	◎◎◎
		大正 2 3	
★	◎	4 5	◎◎
★		6 7	◎
		8 9	
★	◎◎	10 11	◎◎◎
		12 13	
	◎	14 15	◎
★	◎	昭和 2 3	◎◎
★	◎◎	4 5	◎◎◎
★	◎	6 7	◎◎
★★	◎	8 9	◎◎◎ ()
★★	◎	10 11	◎◎ ◎★
★		12 13	◎
★	◎	14 15	◎◎
★		16 17	◎
★★	◎	18 19	◎◎◎
★	◎	20 21	◎◎
★	◎	22 23	◎ ★
★	◎◎	24 25	◎ ★★
	◎◎	26 27	◎◎
	◎◎	28 29	★★
	◎◎◎	30 31	★★★
	◎◎◎	32 33	★★★
	◎◎◎◎	34 35	★★★ ◻
	◎◎◎	36 37	★★★
	◎◎◎◎◎ ◻◻◻ +	38 39	★★★★◻◻◻◻◻
	◎◎ ◻◻◻ +++	40 41	★★★ ◻◻◻
	◻◻ +++	42 43	★★ ◻
	◻ +	44 45	★ ◻
	+	46 47	◻

★ ススム
 ◎ トル
 ◻ ケル
 + パクル

◎ タマゴロ
 ★ オタマジャクシ
 ◻ オタマ

表9

表10

ひ っ か く (高 浜)	生 年	玄 孫 (高 浜)
	明治 30 31	
	32 33	
◎	34 35	◎
◎◎◎ ◎	36 37	◎◎◎◎
◎	38 39	◎
◎◎◎	40 41	◎◎◎
◎◎	42 43	◎◎
◎	44 45	◎
◎	大正 2 3	◎
◎ ◎◎	4 5	◎◎◎
◎	6 7	◎
◎◎	8 9	◎◎
◎◎◎◎◎	10 11	◎◎◎◎◎
◎	12 13	◎
◎	14 15	◎
◎◎◎◎◎	昭和 2 3	◎◎◎◎◎
◎◎◎	4 5	◎ ◎◎
◎ ◎◎	6 7	◎◎ ◎
◎ ◎◎◎	8 9	◎◎ ◎
◎ ◎◎◎	10 11	◎ ◎◎◎◎
◎ ◎	12 13	◎◎◎
◎ ◎◎	14 15	◎◎
◎	16 17	◎
◎◎	18 19	◎◎
◎	20 21	◎
★	22 23	◎
◎◎◎	24 25	◎◎◎
◎	26 27	▲
◎◎◎	28 29	◎◎◎
◎ ◎◎◎	30 31	◎ ▲ ×
◎◎◎▲	32 33	◎ ▲▲▲
◎◎ ▲▲	34 35	▲▲ ××
◎◎ ◎◎◎	36 37	▲▲▲▲▲
◎◎◎▲▲	38 39	▲▲▲ ××
◎◎ ▲	40 41	▲▲▲
◎ ▲▲	42 43	▲ ××
▲▲▲▲▲	44 45	▲ ××××
▲▲▲▲▲	46 47	▲ ××××

- ◎ カキミシル
- ◎ カシミキル
- ◎ カシミル
- ▲ ヒツカク
- ★ カキムシル

- ◎ ヤシヤラ
- ◎ ヤシヤゴ
- ◎ ヤシヤラゴ
- ▲ ヒ (-) ヒマゴ
- × 知らない

表11

表12

もっこをかつぐ (南知多)	生 年	天秤棒をかつぐ (南知多)
	明治 30 31	
●	32 33	▲
●	34 35	▲
	36 37	
●●	38 39	▲▲
●●●	40 41	▲▲▲
	42 43	
●	44 45	▲
●●	大正 2 3	▲▲
●●●	4 5	▲▲▲
●	6 7	▲
●●● ▲	8 9	▲▲▲▲
●● ▲▲	10 11	▲▲▲▲
●● □□	12 13	▲▲▲▲
●● □□	14 15	▲▲▲▲
● ▲ □□	昭和 2 3	▲▲▲▲
▲ □□	4 5	▲▲▲
● ▲ □□	6 7	▲▲▲▲
●● ▲	8 9	▲▲ □
● □	10 11	□□
● □□	12 13	□□□
●●	14 15	□□
● □□	16 17	□□□
● □ ★	18 19	□ ★★
● ★★	20 21	□ ★★
□ ★★	22 23	□ ★★
□	24 25	□
□ ★	26 27	□ ★
□□ ★★	28 29	□□ ★★
□ ★★	30 31	□ ★★
★★	32 33	★★
★★★	34 35	★★★
★★	36 37	★★
★★★★	38 39	★★★★
★★★★	40 41	★★★★
★★	42 43	★★
★	44 45	★
★★	46 47	★★

- ズル
- ▲ イナウ
- カズク
- ★ カツグ

表13

表14

物をかぞえる (土 岐)	生 年	金をかぞえる (土 岐)
	明治 30 31	
◎	32 33	◎
	34 35	
◎	36 37	◎
◎	38 39	◎
◎ ◎	40 41	◎ ◎
◎◎ ★	42 43	◎◎◎
◎ ◎◎	44 45	◎ ◎◎
	大正 2 3	
◎ ◎	4 5	◎ ◎
◎	6 7	◎
	8 9	
◎ ◎ ★	10 11	◎◎ ◎
	12 13	
★	14 15	◎
◎ ★	昭和 2 3	◎ ◎
◎ ◎ ★	4 5	◎ ◎◎
◎ ★	6 7	◎ ◎
★★★★	8 9	◎◎◎
◎ ★★	10 11	◎◎◎
◎	12 13	◎
◎ ★	14 15	◎◎
◎	16 17	◎
★★★★	18 19	◎◎ ★
★★	20 21	◎◎
★★	22 23	◎ ★
◎ ★★	24 25	◎◎ ★
★★	26 27	★★
★★	28 29	◎ ★
★★★★	30 31	◎◎ ★
◎ ★★	32 33	◎ ★★
◎ ★★★★★	34 35	★★★★★
◎ ★★	36 37	◎ ★★
★★★★★★★★★	38 39	◎◎ ★★★★★★
★★★★★★★	40 41	◎◎◎ ★★
★★★	42 43	◎ ★★
★★	44 45	★★
★	46 47	★

- ◎ カンジョーセル
- ◎ カンジョースル
- ★ カゾエル

表15

表16

はな紙 (高浜)	生 年	トイレの紙 (高浜)
	明治 30 31	
	32 33	
◎	34 35	★
◎◎◎◎	36 37	★★★★
◎	38 39	★
◎◎◎	40 41	★★★
◎◎	42 43	★★
◎	44 45	★
◎	大正 2 3	★
◎◎◎	4 5	★★ ◻
◎	6 7	★
◎◎	8 9	★★
◎◎◎◎◎	10 11	★★ ◻◻◻
◎	12 13	★
◎	14 15	★
◎◎◎◎ ▲	昭和 2 3	★★★ ◻◻
◎◎ ▲	4 5	★★★★
◎◎ ▲	6 7	★★ ◻
◎ ▲▲	8 9	★★★
◎◎◎◎ ▲	10 11	★★★★★
◎◎ ▲▲	12 13	★ ◻
◎	14 15	★★
◎◎	16 17	★
◎	18 19	★★
◎	20 21	★
◎	22 23	★
◎◎◎	24 25	★★ ◻
◎	26 27	▲
◎◎◎	28 29	★★★
◎◎◎	30 31	★★ ▲
◎◎◎◎	32 33	★★★★
◎◎◎◎	34 35	★★ ▲▲
◎◎◎◎◎	36 37	★★ ▲▲ ◎
◎◎◎◎◎	38 39	★★★ ▲ ◎
◎◎◎	40 41	▲▲ ◎
◎◎◎	42 43	★★ ▲
◎◎◎◎◎	44 45	★ ◎◎◎ +
◎◎◎◎◎	46 47	★★ ◎ ++

- ◎ ハナガミ
- ▲ チリガミ, チリシ
- ★ ベンジョ (ノ) カミ
- ◻ オトシガミ
- + トイレットペーパー

表17

表18

ネ シ ヨ (熊野川)	生 年	片 足 と び (土 岐)
▲▲	明治 30 31	
▲	32 33	◎
▲▲	34 35	
▲ ×	36 37	◎
▲	38 39	◎
▲▲ ●	40 41	◎◎
▲▲ ●	42 43	◎◎◎
▲ ●	44 45	◎◎◎
●	大正 2 3	
▲	4 5	◎◎
	6 7	◎
▲ ●●	8 9	
▲	10 11	◎◎◎
●	12 13	
●	14 15	◎
●	昭和 2 3	◎◎
●	4 5	◎◎◎
▲ ● ×	6 7	◎◎
●●	8 9	◎◎◎
	10 11	◎◎◎
●●	12 13	◎
●●●	14 15	◎ ×
	16 17	×
●	18 19	×××
●	20 21	××
●	22 23	××
●	24 25	×× ★
×	26 27	× ★
●●	28 29	××
	30 31	×× ★
×	32 33	★★ △
	34 35	★★ ★△ △
×	36 37	★ ▲▲
	38 39	▲▲▲▲▲▲▲▲
××	40 41	★★ ▲▲▲▲
××	42 43	★ ▲▲
	44 45	★ ▲
	46 47	▲

▲ 使用語
 ● 理解語
 × 知らない

◎ チングリ
 × 知らない
 ★ カタアシトビ
 ▲ ケンケン

表19

表20

明 明 後 日 (高 浜)	生 年	す り 鉢 (高 浜)
	明治 30 31	
	32 33	
○	34 35	○
○○○ ●	36 37	○○○ ▲
○	38 39	○
○○ ●	40 41	○○ ▲
○○	42 43	○○
●	44 45	○
○	大正 2 3	○
○○○	4 5	○○○
▲	6 7	○
○○	8 9	○○
○○○ ▲▲	10 11	○○○○○
○	12 13	○
▲	14 15	▲
▲▲▲▲▲	昭和 2 3	○○○○○ ▲
○○ ▲	4 5	○○○
▲▲ □	6 7	○○○
▲▲ □	8 9	○○○
▲▲▲▲ □	10 11	○○○○○
▲ □	12 13	○○
▲ □	14 15	○○
▲	16 17	○
□□	18 19	○○
□	20 21	○
□	22 23	○
▲ □□	24 25	○○○
□	26 27	○
□□□	28 29	○○○
▲ □□	30 31	○○○
□□□□	32 33	○○○○
□□□ ×	34 35	○○○○
□□□□□	36 37	○○○○○
□□□□□	38 39	○○○○○
□ ★ ×	40 41	○○○
□ ××	42 43	○ ××
□□ ×××	44 45	○○○ ××
□ ★ ×××	46 47	○○ ×××

- ヒガサツテ
- ヒガアサツテ
- ▲ シガアサツテ
- シガサツテ
- ★ シアサツテ
- × 知らない

- スリバチ
- ▲ アタリバチ
- × 知らない

表21

生 年	すりこぎ (高浜)
明治30 31	
32 33	
34 35	○
36 37	○○○○○
38 39	○
40 41	○○○
42 43	○○
44 45	○
大正 2 3	○
4 5	○○○
6 7	○
8 9	○○
10 11	○○○○○
12 13	○
14 15	○
昭和 2 3	○○○○○
4 5	○○○
6 7	○○○
8 9	○○○
10 11	○○○○○
12 13	○○
14 15	○○
16 17	○
18 19	○○
20 21	○
22 23	○
24 25	○○○
26 27	○
28 29	○○○
30 31	○○○
32 33	○○○○○
34 35	○○○ ×
36 37	○○○ ××
38 39	○○○○○ ×
40 41	○ ××
42 43	×××
44 45	○○ ×××
46 47	×××××

○ スリコギ
× 知らない

表22

生 年	すり鉢 (高浜)	
	男	女
昭和30 31	○○	○
32 33	○○○	○
34 35	○○	○○
36 37	○○	○○○
38 39	○○	○○○
40 41		○○○
42 43	××	○
44 45	○○ ××	○
46 47	×××	○○

○ スリバチ
× 知らない

表23

生 年	すりこぎ (高浜)	
	男	女
昭和30 31	○○	○
32 33	○○○	○
34 35	○ ×	○○
36 37	××	○○○
38 39	○ ×	○○○
40 41		○ ××
42 43	××	×
44 45	○ ×××	○
46 47	×××	××

○ スリコギ
× 知らない